

世界の主要温室効果ガス濃度は観測史上最高を更新

～「WMO 温室効果ガス年報第16号」の公表～

気象庁が運営を担ってから今年で30年を迎えた温室効果ガス世界資料センターの解析によれば、大気中の主要な温室効果ガス（二酸化炭素、メタン、一酸化二窒素）の増加が続いており、2019年の世界平均濃度はいずれも観測史上最高を更新しました。

気象庁は、1990年から世界気象機関（WMO）の温室効果ガス世界資料センター（World Data Centre for Greenhouse Gases: WDCGG）を運営しており、本年で30年を迎えました。同センターでは世界中の温室効果ガス観測データの収集、解析を行っており、2019年までの温室効果ガスの世界平均濃度に関する解析結果等に基づいて、WMOは11月23日に「温室効果ガス年報（Greenhouse Gas Bulletin）第16号」を公表しました。

本年報によると、大気中の主要な温室効果ガス（二酸化炭素、メタン、一酸化二窒素）の増加が続いており、2019年の世界平均濃度はいずれも観測史上最高を更新しました。WDCGGが解析した結果、2018年から2019年までの濃度の増加量は、二酸化炭素は過去10年間平均より大きい2.6 ppmで、メタンは過去10年間平均よりわずかに大きい8 ppbとなりました（別紙）。

年報（気象庁訳抜粋版）は、気象庁ホームページでご覧いただけます。
(https://www.data.jma.go.jp/env/info/wdcgg/wdcgg_bulletin.html)

問合せ先： 大気海洋部 環境・海洋気象課 担当 澤
電話 03-3212-8341（内線 4112） FAX 03-3211-3047

WMO 温室効果ガス年報に掲載された解析結果

表 主要温室効果ガスの 2019 年の世界平均濃度と増加量

	二酸化炭素 CO ₂	メタン CH ₄	一酸化二窒素 N ₂ O
2019 年の世界平均濃度	410.5±0.2 ppm	1877±2 ppb	332.0±0.1 ppb
前年からの増加量	2.6 ppm	8 ppb	0.9 ppb
前年からの増加分の比率	0.64 %	0.43 %	0.27 %
最近 10 年間の平均年増加量	2.37 ppm/年	7.3 ppb/年	0.96 ppb/年
工業化以降の増加分の比率 (カッコ内は工業化以前の濃度)	48 % (約 278 ppm)	160 % (約 722 ppb)	23 % (約 270 ppb)

注: ppm は大気中の分子 100 万個中、ppb は 10 億個中にある対象物質の個数を表す単位です。工業化以前: 1750 年頃を基準

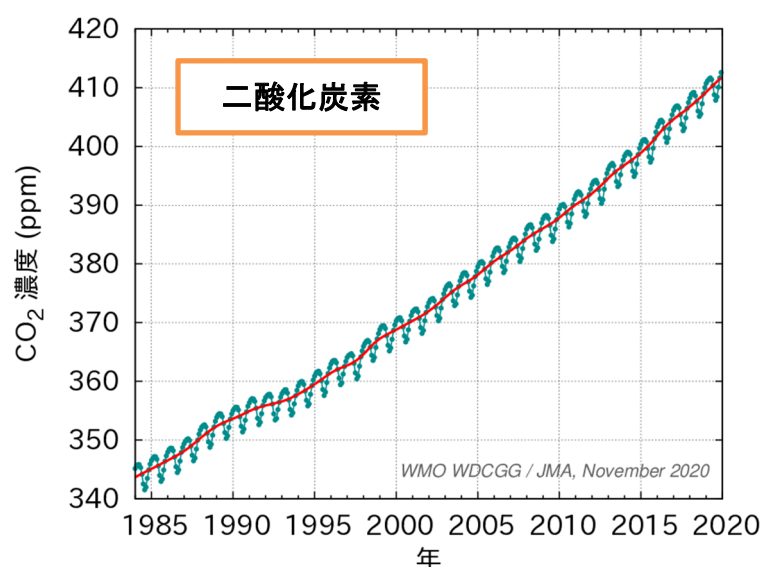


図 1 二酸化炭素の世界平均濃度の経年変化

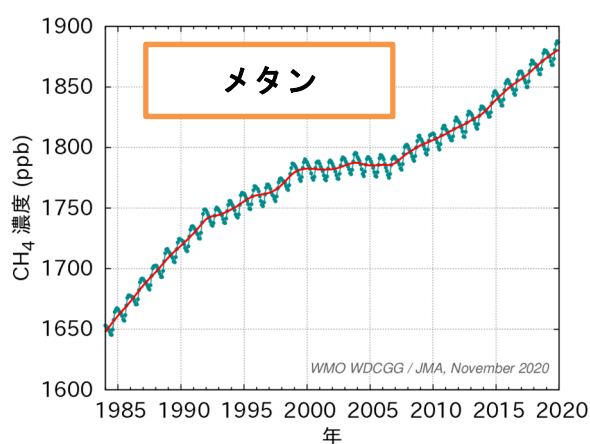


図 2 メタンの世界平均濃度の経年変化

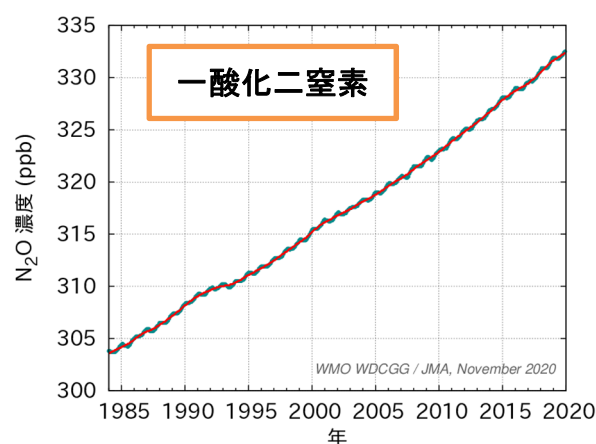


図 3 一酸化二窒素の世界平均濃度の経年変化

注: 図 1,2,3 の凡例 ●: 月平均濃度*、—: 季節変化を除去した経年変化

*各観測地点における月平均濃度を緯度帯ごと(30 度幅)に平均したのち、緯度帯の面積を考慮して平均したもの。使用データ・計算方法については、年報本文及び参考文献を参照してください。

温室効果ガス世界資料センター（WDCGG）とは

気象庁は世界気象機関(WMO)の要請に基づいて、1990 年より温室効果ガス世界資料センター(World Data Centre for Greenhouse Gases: WDCGG)を運営しており、本年(2020 年)で設立 30 周年を迎えました。WDCGG は、温室効果ガスやエアロゾル、オゾンなど地球環境の長期的な監視やその結果を提供する WMO 全球大気監視(Global Atmosphere Watch: GAW)計画の下に設立されており、全世界から報告される温室効果ガス観測データを収集し、提供している世界で唯一の国際的な機関です。

WDCGG には、地上観測点のほか船舶や航空機及び人工衛星で取得された二酸化炭素やメタン等の各種温室効果ガス観測データが登録されています。WDCGG はこれらのデータを利用して様々な解析を行っており、その結果は、WMO 温室効果ガス年報として気候変動に関する国際連合枠組条約(UNFCCC)の締約国会議(COP)で毎年配布されるなど、温室効果ガスの現状を伝える活動に活用されています。さらに、WDCGG が提供している観測データや解析結果は、世界の温室効果ガスの研究者にも広く利用されています。

温室効果ガス世界資料センター（WDCGG）の概要

